

ゆとり

大阪大から近畿大に移ったきっかけは

塩崎 平成13年に近大医学部の第一外科の教授が退職され、その後継としてです。3年後には近大附属病院の病院長になりましたが、まだ近大に来て3年でキャリアもありませんでした。当時の世耕弘昭理事長に引き受けられないと断ったら、それなら「辞めるか」と。はっきりとした人でした。

それでも引き受けた理由について

塩崎 最先端のがん診断装置を大学に導入すること引き換えに、病院長に就きました。がんの早期発見に有効な「PET」と呼ばれる装置を3台も入れていただきました。

病院長時代、自身に胃がんが見つかりました

塩崎 胃がんが発見されたのは病院長に就いて1年ぐらいです。見つかったのはPETの最初のモニターとして検査したのがきっかけでした。見つかったときにはもう手術をしても手遅れの状態で、いわゆる末期がんでした。

——どんな心境でしたか

塩崎 医師として同じ病状の患者を手術してきましたが、考えてみると1人も助かっていな

医師として、学長として 3

発覚した自身のがんはもう手遅れならば、誰もやっていない治療を。

塩崎均さん

近畿大学学長

しおさきひとし

い。助けることができなかった。それだけに「もうダメだな」と覚悟しました。

——死ぬことが怖くはなかったのですか

塩崎 そうい患者をたくさんみてきて、自分のがんになったからといって慌てることはありませんでした。病院長として、やりたいことがあったので、やり遂げようと考えました。ただ、その代わり治療は何もしないようにしよう決めました。

——その後、どのように心境が変化したのですか

塩崎 それから1週間がたち、



検査の結果が出る中で「やっぱり生きよう」と思うようになりました。同じ状態の人を手術で助けられなかったのに、自分がこのまま何もしないでよいのか。それは許されたいだろうか。それは許されたいだろうか。考えました。それならば、誰もやっていない治療をしてみようと思いいちました。

——どういう治療ですか

塩崎 化学放射線治療です。

ただ、放射線治療の教授に、自分の名前をふせてこういう患者がいるからとみてもらったところ「胃がんには効かない。絶対にだめだ」と言われました。副作用の危険もありましたから。それでも午前9時から午前11時まで抗がん剤を点滴し、11時から放射線治療を受け、昼からは病院長の仕事をしました。

——なぜ、危険を冒してまで化学放射線治療をやるかと

塩崎 効果があると思っていました。化学放射線治療は食道がんに対しては効果があります。日本人では食道がんと胃がんは違う性質のがんですが、欧米人は半分ぐらい同じ性質なんです。もしかしたら、胃がんにも効くかもしれないと考え、自信もありました。

——効果は

塩崎 2カ月ほどで画像ではがんが確認されなくなりました。今は手術してくれた医師が中心となって治療法として広まり、術例も増えています。「これまで亡くなられた患者に報告することができたではないか」と言ってもらえるのならうれしいです。

——一度は死を覚悟すること何か変わったところはありますか

塩崎 これまで生きてきたことのひとつ一つの意味付けができるようになってきました。これから先のこと一つ一つ意味付けをしながら生きていきたいと思っています。生きることがますます楽になりました。言い換えれば、あまり考えなくなったのかもかもしれません。(聞き手 橋本亮)



胃がんが見つかり、「誰もやっていない治療をしてみようと思った」と当時を振り返る塩崎均さん＝大阪府東大阪市